



地域おこし協力隊になるまで

四国中央市 地域おこし協力隊 菊池 睦



平成29年4月に四国中央市最初の協力隊の一人として着任しました。それまでは東京都内でいろいろな仕事をしていましたが、今回の特集テーマと関連するところでは、出版社でアナログゲームの宣伝業務を主に担当していました。また、キャラクターグッズのプロデュースやアニメの制作にも関わっていた経験もあります。その前は、フリーランスのライターとして、雑誌やウェブメディアの記事を執筆していました。

偶然見つけた金砂・富郷地区

現在着任している四国中央市の金砂・富郷地区を選んだ理由は、実は偶然でした。軽い気持ちで参加していた移住フェアで四国中央市のブースに立ち寄って、話を聞いているうちに魅力を感じ、翌週には現地を訪れていました。ちょうど転職も検討していた頃だったので、人生一度くらいは冒険してみるかと長く暮らしていた東京を離

れ、初めて四国へやってきました。地域にはこれまで移住者がほとんどいなかったため、最初のうちはどういう距離感で接すればいいのかわかりにくく苦労していましたが、地域行事に積極的に参加しているうちに受け入れられていったと思います。

地域おこし協力隊としてのメイン業務は地域PRと情報発信でしたが、これまで何か下地があったものを追加・拡大していくのではなく、まったく一からのスタートでした。まずは地域をPRするために、すでにある特産品である富郷茶を軸に情報発信するのはどうかと考えましたが、これまで富郷茶は地域や市内では販売されているものの、東予地域や県内に広げると知名度はあまり大きくないのもまた事実でした。そこで、まずは地域そのものを知ってもらうために、地域にあるサイクリングロードに注目しました。

愛媛県は、サイクリングに力を入れているのが存じの通りで、活動地域にも「別子・翠波はな輪道」との名前でサイクリングコースが整備されています。さらに、愛媛県認定のサイクリングの休憩所である「サ

イクルオアシス」が順次整備されており、平成30年度が四国中央市を重点整備する年度であることも知りました。自分一人で地域をPRするよりも、県が力を入れていくサイクリングに関連してPRした方が、より効果的に地域をPRできると考え、まずはサイクルオアシスを整備することにしました。

サイクルオアシスの整備による効果

サイクルオアシスの認定を受けるための条件などを確認し、それに合致する施設の準備が始まり、場所はJ・Aうまご厚意で、J・Aうま富郷出張所に隣接し休業していたガソリンスタンドを使わせていただけたことになりました。倉庫として使われていた建物内の整備や、給油機が据え付けられていた屋外の整備だけでなく、許認可に関連して消防署などへも足を運び、平成30年9月にサイクルオアシスの認定を受けることができました。現在サイクルオアシスは、地域情報の発信拠点として、協力隊の活動拠点にもなっています。



©株式会社双葉社/道後温泉 湯築屋/田井ノエル

あわせて、移住してきてから撮りためていた地域の写真に解説をつけ、冊子を作りましたが、これが新聞に取り上げられたこともあり、「冊子を読みたい」「遠方に住んでいる家族へ送りたい」などの問い合わせも多くありました。地域PRの点ではうまくいった事例になりましたが、最終的には富郷茶のPRや販路の拡大へつなげていきたいので、これを足がかりに残りの任期で次のステップへ進んでいきたいと思っています。



地域おこし協力隊が見つけた金砂・富郷の景色

アニメ等のコンテンツを活用した地域情報の発信

ところで、地域PRという協力隊の業務の観点からも、今回の舞たうんの特集テーマにも触れておきたいと思います。道後温泉やしまなみ海道、下灘駅などが登場したりモチーフになったりしたりするコンテンツはいくつもありますが、作品のメイン舞台になつているとまではいえないものばかりです。一方、お隣の香川県では、観音寺市や小豆島が舞台のコンテンツがあり、高速道路のサービスエリアなどでコラボした地域PRのポスターを見たことがある方も多いいと思います。こういったコンテンツを活用した地域発信をするにあたって、どういった活用がファンに喜ばれるのか、効果的な地域PRになるのかをしつかり理解しておく必要があります。

そこでオススメしたいのが、双葉文庫から出版されているライトノベル小説の「道後温泉 湯築屋」シリーズ(田井ノエル著)です。作品名の通り、道後温泉が舞台でそこにある架空の温泉宿「湯築屋」のお話です。湯築屋は道後公園にあつたお城の名前です。この作品は、道後温泉に浸かりに来る世界中の神様とそれをもてなす温泉宿のハートフルなお話ですので、誰でも読みやすい作品だと思えます。そして、愛媛県に住んでいればニヤリとする単語がそこかしこにちりばめられています。道後温泉駅前の足湯に浸かつてじゃこ天を食べる神様とそのじゃこ天とはなにかを説明する主人公など、時に観光ガイドとして、松山や愛媛の魅力を発信しているともいえます。

作中には、郡中の五色浜、宇和島の牛鬼、北条の鯛飯、新宮の霧の森大福、松山城なども登場します。作品の面白さもありますが、普段からよく見てよく知っているものを物語に落とし込むとどう描写されているのか。それは地域PRを行う上でのヒントにもなるのではないのでしょうか。